

服飾造形における技術的研究（第4報）

—セレモニードレスの製作—

山本高美, 山本 政

A Study on the Technical Features of Costume and Art (IV)

—The Making of Ceremonial Dress for Formal Wears—

Takami Yamamoto and Masa Yamamoto

現代の生活にマッチした形態のフォーマルドレスを、以前から和服のリフォームも含め製作してきた。それらの、合理的なフォーマルドレス数体は、TPOにあわせて便利に装着し今日に至っている。なかでも、和服をリフォームした各ドレスは、素材面の経済性を追求しつつデザインの研究につながるものであった。また、視野をかえ考慮するに地球環境が叫ばれている今日、有意義なことと思われ和服を用いてデザイン性・合理性を追求し、セレモニードレスを製作した。

素材は、単衣長着の明石（縮緬）を使用した。この明石縮緬は、型友禅で染色は美しかったが柄行には現代ファッションとのずれがあり、リフォームで生かそうと考え黒無地に染め直した。そのために浮き上がった銀糸の縫取を生かして、デザインを行うこととした。

和服からのリフォームは、限られた用尺と形態であり、寸分の間違いも許されない。そこで、シーチングによる仮縫製をへて裁断を行った。なお、今回はアパレルCADでマーキングを行い、その可能性を探った。

造形的には、ユニティとハーモニーを主眼に置きデザインを行った。そのポイントは、ストレーラインのドレスに縫取をどのように、切り替えていくかが課題であった。そこで、ボーダー柄を最大限に生かすため前中心に短冊を入れ、そのためにはぎが入る箇所をピンタックで美的に構成した。

合理性を追求したこの作品は、ロング丈兼ノーマル丈であり以前からの研究成果を踏まえ、和服のおはしよりからヒントを得たものである。合理的形態のドレスとして、衣生活の経済性をも考慮し、着脱・着装においてその追求を行った。今後は、和服素材の研究やリフォームにおいて、CADを利用しさらに深めていきたい。

キーワード：セレモニードレス、CAD、デザイン性、リフォーム、和服

緒 言

21世紀をむかえ、情報通信技術の発達など大学の被服教育においても、手法やその内容が変わりつつある。本学でも、インターネットが常時接続となり、教室においてはプレゼンテーション機器やCADも導入され、情報機器を使用した授業環境が整備された。一方、生活面においては多様化傾向がみられ、レジャー・余暇生活にその力点が移行してきた。それらが及ぼす現代社会においては、環境問題への対応も急務といえ、リユース・リサイクル・リフォームは重要な関心事と言える。

そこで、現代の生活にマッチした形態のフォーマルドレスを、和服のリフォームで製作することにした。生活の多様化に対応し丈の調節ができるドレス形態を、以前からの研究結果を踏まえてさらに追求する。箆笥に眠っている和服を使用することで現代の社会環境に対応でき、また和服の高級素材を用いることで、フォーマル性へのグレードも高くなると思われる。今回使用する素材は、明石縮緬の型友禅を黒地に染め直し、浮き上がった銀糸の縫取を生かし、造形面に焦点を当ててデザイン・研究を行うこととする。また、本研究はパターンメイキング・マーキングなどにおいてアパレルCADを駆使し、和服のリフォームという課題の中でその可能性を探る。

研究方法

1 資 料

資料として、明石縮緬で手捺染と思われる型友禅の単衣長着を使用する。写真は昭和23年頃写したものであり、写真1に示すとおり撮影時の写真が白黒である。鮮明に覚えている色相は品良く、それでいて彩度や明度の高い美しい友禅染めであった。しかし、柄行には現代ファッションとのずれがあり、リフォームで生かそうと考え黒地に染め直した。染め直した生地は、写真2に示す通りであり、銀糸の縫取が浮かび上がり、黒色と銀色のコントラストが落ち着いた美しさを醸しだすものとなった。

2 布地の点検

材料の明石縮緬は周知のように夏の和服地である。当然リフォームも夏のフォーマルドレスとして計画した。しかし、長年経過した布であること、染め直したことにより布に腰がなくなり、弱くなっている。また、布は縮緬であるため、ことさら先述の経過により布幅が一定しておらず、銀糸の縫取部分にゆがみも生じていた。また、縫目のあった部分に損耗した所が多くみられた。



写真1 資料の単衣長着
(昭和23年撮影)



写真2 単衣長着を黒地に染め直した状態

まず、染めのために縫い合わせて、1反になった布の縫い目をほどこき各パーツに分離した。裁ち切り寸法は図1に示すとおりである。紋様は図2に示すとおりであり、一柄86cmで3本の銀糸により構成された一方方向の柄行きである。

3 デザイン設定

布の柄行から、銀の縫取をポイントとした造形的な作品となるよう考慮し、祝賀用のセレモニードレスとしてデザインした。

ジャケットは、前中心に突き合わせの短冊を入れループ止めとした。そのため、並幅を縦に裁断することから、はぎを入れざるを得ない。そこで、ピンタックを斜めに3本入れデザイン線とし、はぎ位置を隠すようにした。衿は、前短冊から続くラベルの小さいオープンカラーとし、柄を生かすためとデザインの統一性を持たせるために、2本のピンタックを斜めに入れはぎ位置も隠した。袖は、デザイン性と機能性および布幅を考慮してヨークスリーブとし、袖口に銀糸部分を使用して、切り替えを入れループ明きとし装飾も兼ねた。

下衣は、上半身から続くワンピース形式とした。ワンピースのトップ部分はノースリーブとし、ボトムはHLに紐通し位置を設定し丈の調節をはかった。また、布幅に制限がある中で、蹴まわし寸法の確保をするために、8枚はぎのゴアード形式とし、各縫い目部分に別裁ちにした表布でボックスプリーツを入れた。

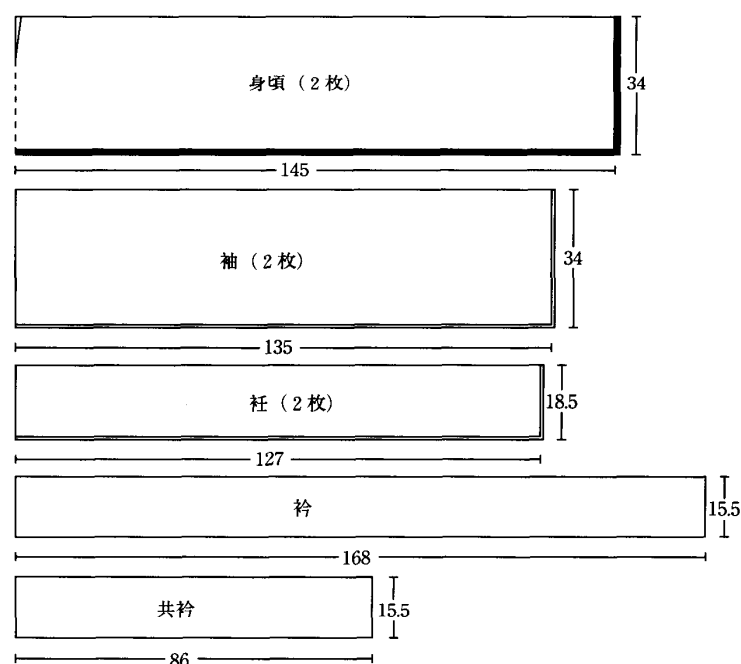


図1 単衣長着の裁ち切り寸法

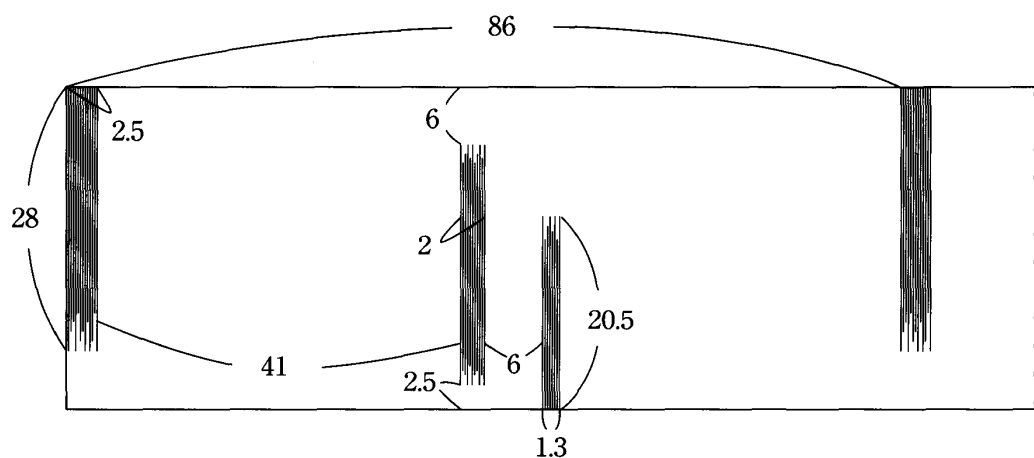


図2 単衣長着の柄行

4 製図と仮縫製

1) 製 図

銀糸のボーダー柄を生かすため、できるだけ切り替え線を少なく、また柄あわせを考慮して製図を行った。

ジャケットの前身頃は、胸ぐせ分量が多くダーツ量を、サイドダーツ・ウエストダーツ・裾線の3カ所に分散した。袖は、袖山をつき合わせにしたが、袖幅が不足するため後袖の肘ダーツ位置を利用して切り替え線を入れたデザインとした。

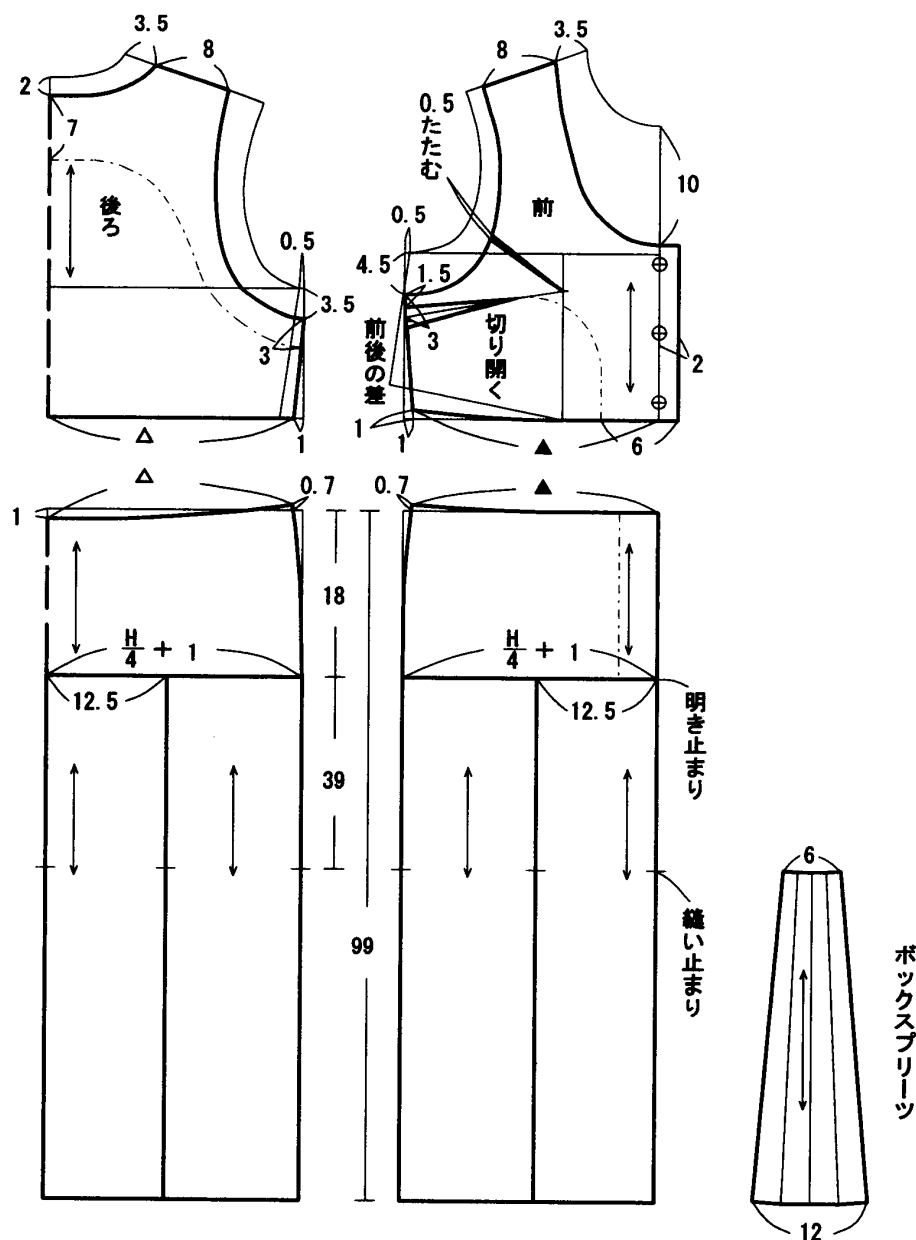


図4 ワンピースの製図

5 本製作

1) 裁断

試着補正後のパターンを用いて裁断を行うため、縫い代は最小限に留めることができ、写真4に示すように配置した。まずは着物時の柄あわせを利用してスカートのパターンを長着の前・後身頃の裾から配置した。ジャケットの身頃は長着の袖部分を使用し、袖はヨークスリーブとしたため衿肩明きの部分を有効に利用できた。しかし、あまり部分が少なくなり、銀糸の縫取柄を短冊や袖口などに利用することは難しくなった。そこで、スカート部分にお

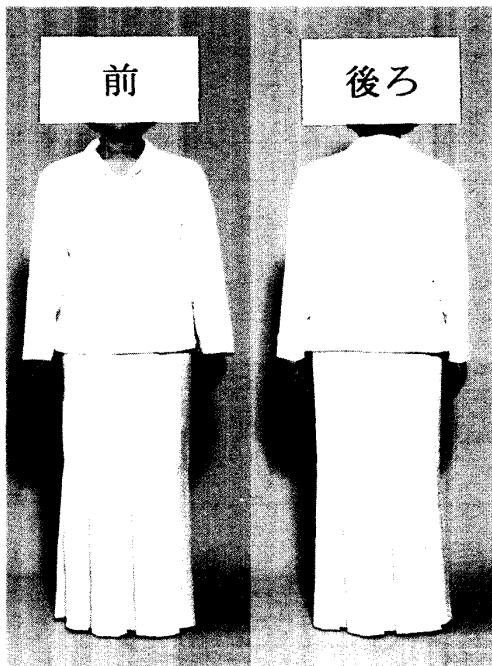


写真3 シーチングによる仮縫製

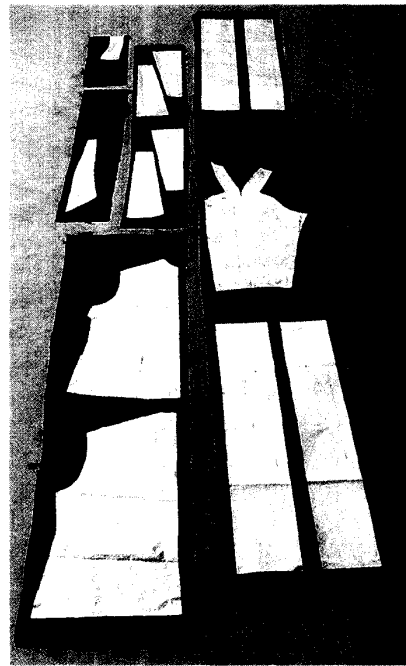


写真4 パターン配置

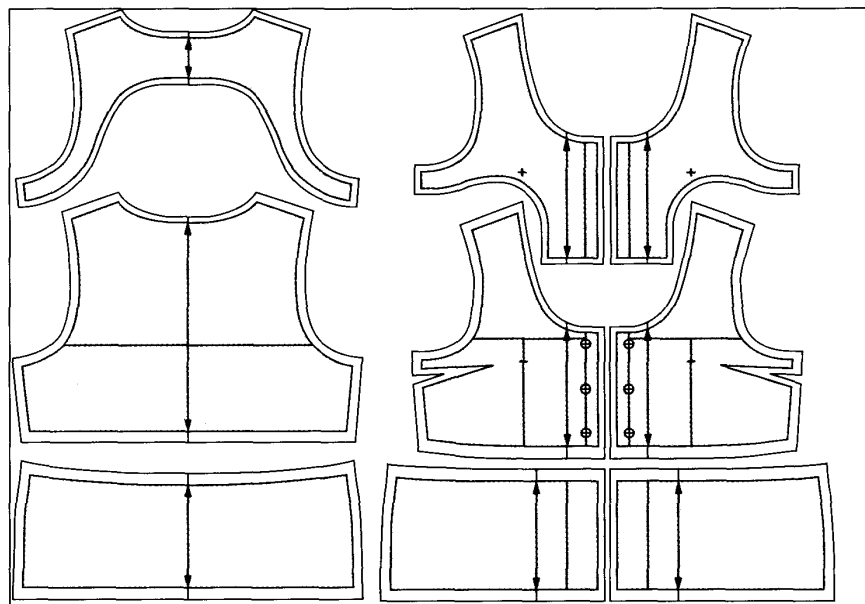


図5 別布（クレープデシン）のマーキング

いて、表布の使用は紐通し位置（腰丈18cmのH.L位）からとし、トップから腰の部分までを別布（ポリエステル100%のクレープデシン）とし表布を確保した。マーキングは、図5に示す通りである。表地における洋服全パーツのマーキングは図6に示す通りであり、いずれもCADを使用して作成したものである。

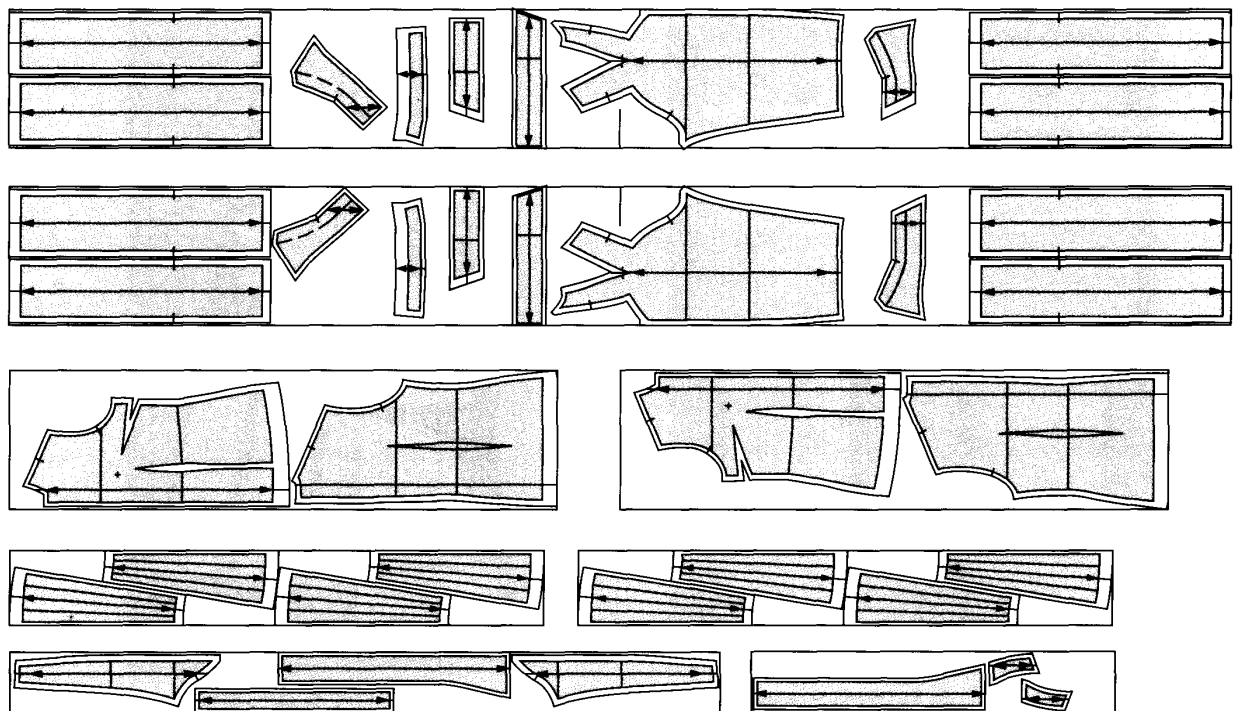


図6 表布のマーキング

2) 仮縫い

布が極度に弱っている事から、形態安定性と補強を考慮して各部分へ芯を接着した。ジャケットは、前芯と裏衿に旭化成アピコ200番を使用した。背、裾、袖口、肩からヨークにかけてはアピコ100番を用いた。ワンピースのボトム部分は腰部で布に最も無理がかかるため、切り替え位置からボックスプリーツ付け位置より2cm下までアピコ100番の芯を接着した。裾は自然な張りを持たせるため、縫い代側に用いた。芯の接着は、ボーダー柄が水平に通るようバキュームプレス機で柄のゆがみを直し、固定した後に行った。

仮縫いは写真5に示すとおりであり、衿・短冊・袖口の切り替えはシーチングを用いて、ボーダーの配置や、柄を生かすためのピンタック位置および、はぎ位置を吟味した。前短冊のピンタック位置（一部はぎ位置）は、縫取や反物の幅および、短冊と前身頃のバランスを考慮して、黒いボディライン（立体裁断用テープ）で位置を設定した。

3) 本縫い

まずは、仮縫い時に表布未裁断の衿・見返し・前短冊・袖口切り替えの裁断を行った。わずかな縫取柄を効果的に用いるための工夫として、表衿の柄及び切り替え・ピンタック位置をパターンに印し、折り返りのゆとりや衿外回りの縫製を考慮したパターンを作り裁断を行った。前短冊布や見返しは、柄あわせ・布目・布幅の関係から数カ所のはぎが入り細かい

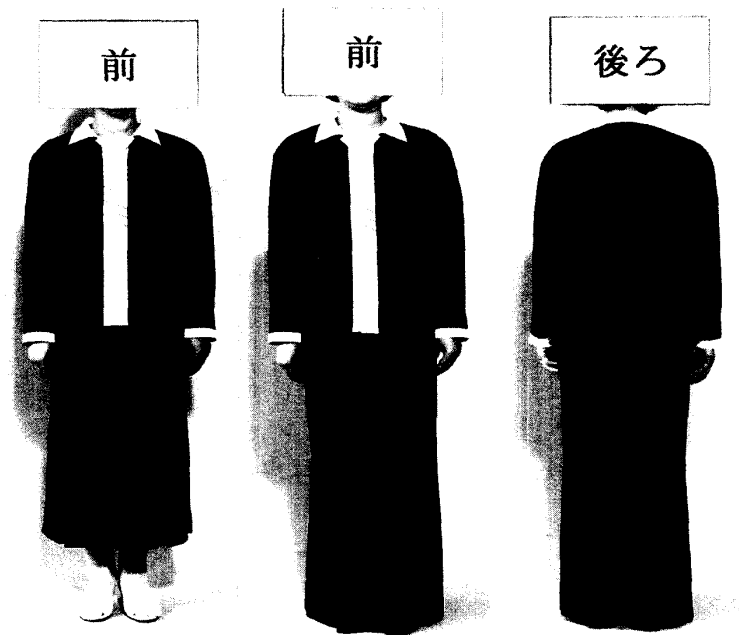


写真5 仮縫い

パーツとなった。裏地は、キュプラ100%のローン（旭化成、ベンサマーライン）を用いたため、表の素材にマッチし縫製しやすかった。

ジャケットの縫製ポイントは前中心に、ピンタックを入れた点である。はぎ位置は写真6に示すとおりであり、ピンタックを上前・下前とも3本ずつ斜めに入れた。そのために、布がバイヤスに近くなることで伸びやすく、ピンタック位置を合わせることは難しい作業であった。上前の前端にループ、下前の前端に別裁ちの持ち出しを付けた。持ち出しは前端の突き合わせ位置で短冊を固定し、美的着用につながるよう縫製を行った。衿はボーダー柄を前面の右側に、ピンタックを後面左側に配した。写真7に示すとおりであり、ピンタックの位置ではぎを入れて縫製した。袖は、肘ダーツの切り替え線を利用して明きを作り、写真8に示すように、袖口の切り替え部分にループを付けボタンを配し、着脱のしやすさを考慮した。

ワンピースは、写真9に示すように8枚の布の間に、蹴廻しを考慮したボックスプリーツを配したため、縫製難度の高いところであった。丈調節の関係からWLを中心に上下の縫製方法を変え、トップは合わせ仕立て、ボトムは丈調節の関係から明きの部分も含めて表・裏を完全に離す縫製とした。裏スカートは、丈の調製を念頭におき、ノーマル丈に合わせて設定した。また、後ろ中心は輪裁ちとし、前中心には縫い目を入れて明きを作った。表スカートは、HLの切り替え位置の左前面に楕円の明きを作り、0.5cm幅のサテンリボン通した。

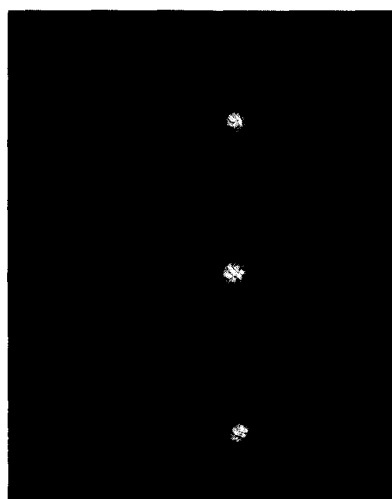


写真6 前短冊のはぎ位置およびピンタック



写真7 衿のはぎ位置およびピンタック



写真8 袖口の切り替え・ループ明き



写真9 ワンピースのプリーツ部分

結果・考察

1 造形的デザインおよび経済性への追求

造形美の原則である、ユニティ（統一）とハーモニー（調和）を主眼に置きデザインを行った。そのポイントは、ストレートラインのドレスにボーダー柄及び縦横の切り替えを、いかに入れていくかが課題であった。黒地に銀の縫取という生地を生かす工夫として、トップの

前中心に縦の切り替え線を入れボトムはボックスプリーツを配した。ごく少ない銀紙の縫い取りを生かしたデザインのイメージからは、セレモニードレスとしての演出ができたと思われる。また、ピンタック位置は左右段差をつけ、斜めに入れたことで、優雅な雰囲気とアシンメトリーのバランス（平衡）が保たれた。仕上りを写真10に示すように、前短冊に黒地に銀という調和のとれたボタンを配し、全体的に統一のとれたデザインとなったと思われる。

経済性を考慮して、以前から和服のリフォームを行ってきたが、今回の研究材料は表地が2代にわたる98年の年月を経た素材で布が弱っており、また布幅は安定せずボーダー柄も曲がっているなど製作を難しくした。そのために多くの補足材料を必要としたが、補強に使用したアピコ（基布が伸縮素材）100・200番の接着芯により構成、形成効果が得られた。また、合わせ仕立てとした裏地の効果も加わり、洋服完成時において表布地の表現は異なり、形態的にも安定した作品となった。他方、縫取部分が少ないにもかかわらず柄を生かしたデザインにしたことから、別布の使用増加も余儀なくした。

表布の材質である明石は夏物であり、当初は夏用のフォーマルドレスの製作を意図した。しかし、損傷した素材の関係から裏地・芯地を多く使用したため夏冬兼用となった。想定通りではないがかえって、有効に生きる結果となった。なお、別布や裏地は、表布にあわせ夏用の材質を使用し統一感をはかった。

2 合理性への追求

合理性を追求し、ロング丈とノーマル丈という調節が可能なデザインを考案した。ジャケットから隠れるぎりぎりの位置に、紐を通すよう工夫することで用尺の極く少ないボーダー柄でも丈の調節ができる結果が得られた。その仕上りは写真11に示す通りである。また、表地が和服の夏用の生地であり、ボトムの裏地をノーマル丈にたくし上げた位置に合わせたため、ロング丈の場合に裾が少々透けてしまった。しかし、このことがかえって合理性を生む結果となり夏冬兼用に着用できることとなった。

また、今回は時代に即したCADの利用で更なる合理性の追求を行ったものであり、論文作成時において、その可能性を試みた。CADを用いて、表地の裁断図およびジャケット・ワンピースの平面作図を行い、その作図を基にして、縫い代付きフルパターンの作成、およびマーキングを行った。また、詳細な図も書けることから柄行を書くことも試みた。その結果として、合理性への追求は飛躍を見たように思われる。

要 約

環境にやさしく、かつ経済性を加味した和服のリフォームであるセレモニードレスの製作

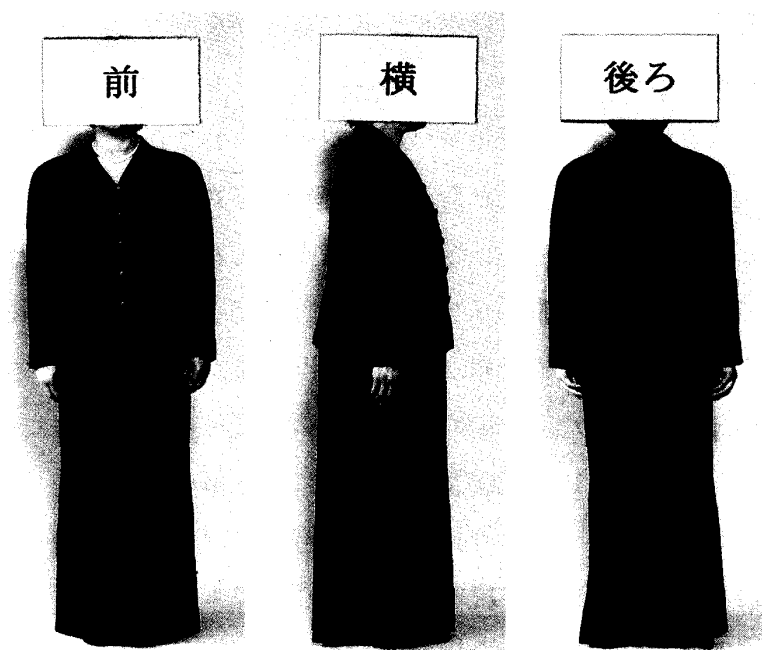


写真10 セレモニードレスの仕上がり

では、素材から造形面に焦点を当て、研究を行った。布地のボーダー柄を生かす工夫として、布幅に制限があることに意を用い、ピントックを利用してはぎを入れた。柄も生き、更にピントックがデザインポイントとなり、造形的にもバランスのとれた作品に仕上がったと思われる。また、祝賀用のフォーマルウェアとして落ち着いた作品となり、ことさら縫取は優雅さを添える結果となった。

他方、材料が長期間を経たこと、また染め直しによって布の張りや強度が落ちていたため、芯や裏地を用い補強した。そのことが、かえって現状のファッション感覚と相俟って、夏冬兼用できる有効性を生みだした。より、合理的な着想形態も追求でき、セレモニードレスとして着用していきたい。

CADによる、作図・マーキング・柄の作図を試みた結果、用尺の限られた着物地でも容易に作成できた。CAD利用は有効であり製作上において、さらなる合理性の追求を行うことができた。今後は、リフォームにおけるCAD利用の可能性について、研究を深めていきたいと思っている。

本研究の製作物は日本服飾学会において展示発表したものである。

文 献

- 1) 文化服装学院編：デザイン (1991) 文化出版局
- 2) 山本政、増田純子：服飾造形における技術的研究 (第1報) 和洋女子大学紀要 37 pp.

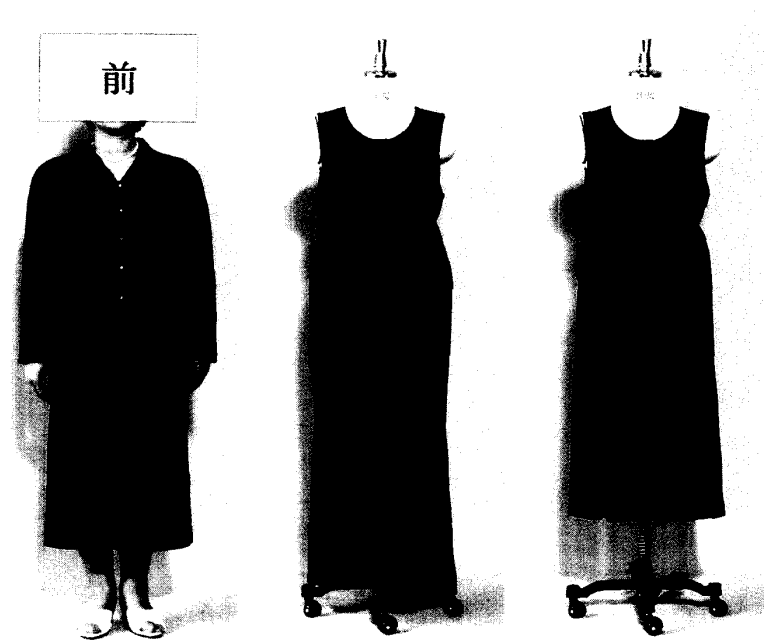


写真11 ワンピースの仕上がりおよび丈の調節

217-229 (1997)

3) 山本高美、山本政：服飾造形における技術的研究（第2報）和洋女子大学紀要 37 pp.

231-241 (1997)

4) 山本高美、山本政：服飾造形における技術的研究（第3報）和洋女子大学紀要 40 pp.

251-262 (2000)

山 本 高 美（家政学部服飾造形学科専任講師）

山 本 政（元家政学部服飾造形学科教授）